



読売俳壇

高野ムツ才選

春雨のおいや地層深きから

宇都宮市 津布久 勇

【評】春雨の匂いといえは、畑の土や若草などの匂いを連想するが、作者は地層の深みからの匂いを感じた。億年前の自然が時を超えて蘇ってくる幻想にとらわれる。

菜の花や核弾頭は一万余

小田原市 北見 鳩彦

【評】一面の菜の花畑を散策中、ふと脳裏をよぎった恐れ。実際、核保有国の核弾頭総数は今も一万を超す。平和とその破壊は紙一重。亡き猫が会いに来ました蝶と成り

東京都 太田 亜希

【評】よく蝶と戯れていた愛猫。亡くなって一冬経たあある日、初蝶と出会った。猫の生まれ変わりと思った。口語表現に喜びがふれる。百千鳥五百羅漢に千の耳

神戸市 岸下 庄二

上履きの踵べちゃんこ鳥雲に

下田市 森本 幸平

路線バス春は暢気に待つものよ
一步一步地球と対話麦踏みぬ
津市 中山 道春

東京都 山田真理子

童の玉地球の青にまざるべし

宝塚市 広田 祝世

夫はもう歳をとらない臍月

大和市 小西さき江

シーソーのかたんと鳴つて初蝶来

対馬市 神宮 齊之

正木ゆう子選

流し目は馬もするなり春祭

高槻市 黒田 豊子

【評】前へと引かれたつ、気になるものに視線を送る馬。余所見と言わず、流し目と言えは、なんと雅。逸ることなく、ゆっくり歩いているのだらう。春祭らしい風情である。

初虹を甘露と舐むる天使たち

吹田市 小森 孝敏

【評】初虹は七十二候のひとつ「虹始見」（虹始めて見ゆ）のことで、晩春の季語。虹の甘い水滴を天使が舐める、とは素敵な空想。雪残る棚田繻ふ名は氷玉川

会津若松市 安藤 和繁

【評】氷玉川は、会津の川。雪の残る棚田を潤しながら流れる川は、雪解け水の冷たさだらう。いかにも美しいにお米の出来そつな棚田だ。春潮の弓なりに行く砂洲の道

茅ヶ崎市 原田 博之

燃やすもの探しながらの春焚火

栃木県 あらみひとし

残照の明石大橋さばら東風
またいつか林檎の花の咲く頃に
風光る口開けて待つ車載船
星を来て星へ消えゆく帰雁かな

泉佐野市 布野 寿

防府市 光井加代子

仙台市 佐藤 庄陸

貝寄風や南の島の星の砂

宝塚市 大曲富士夫

小澤 實選

小名木川を三月十日の赤き徳

川越市 益子さとし

【評】東京下町を流れる小名木川を三月十日に眺めると、ひとつの赤い穂が浮かんでいた。昭和二十年のその日の東京大空襲で多くの子どもも死んだことを思い出すのだ。

田打機の峽に機嫌の響きかな

大阪市 今井 文雄

【評】田打は耕作しやすくなるために田を打ち返すこと、それを耕運機で行っているのだ。エンジンの調子のいい響きもうれしい。春愁や金平糖の色の数

志木市 谷村 康志

【評】金平糖の鮮やかな色のさまざまに、春の憂鬱な感覚を取り合わせた。繊細さを極める取り合わせが、魅力的であった。野良猫の舐めて行く薄氷

和泉市 山崎 文恵

レシ袋越えてゆきたり春の山

三原市 天崎 千寿

レンタルの妍を競つて卒業す
用を足し毛繕いして猫の恋
近道とて板さし渡す春の泥

名古屋市 可知 豊親

新潟市 古泉 浩子

新しきコーヒーカップ春の星

池田市 後藤 和豊

元禄の瓜実顔の女難かな

春日部市 中沢 泰三

津川絵理子選

春雷やガトリーシヨラの濃き断面

福岡市 稲永 順士

【評】他のケーキに比べて重量感のあるガトリーシヨラ。綺麗に切り分けられた「濃き断面」の発見が、春雷を聞く驚きと響き合う。ケーキも春雷も意外にあっさりしている。春の水消すのは惜しき落書きぞ

よく描けた落書きなだらう

東京都 関 美奈子

【評】亡くなった母へ死に化粧をほどこす。悲しみのうちにありながら、紅が少し華やいで見える。春燈の明るさと呼応するように。末黒野や不機嫌をまた持ち歩く

川崎市 西 順子

新たななる力つきつき春の波
靴から顔出す犬や木の芽風
暖かや二足歩行を始める子

日立市 菊池三三夫

えびね咲き庭の片隅秘境めく

宇都宮市 大門とよ子

黄沙降るマイクロプラスチック混ぜ
梅日和雲水の買うチヨコポッキ

神奈川県 中島やさか

東京都 望月 清彦

京都府 根来 滋

夜なべする牧水

久永草太（歌人）

短歌あれこれ

起床。切前の歌人の朝は遅い。早起きしてもどうせ頭が動かないからである。洗濯だの掃除だのを済ませ、頭が冴えた頃合いで食パンを一枚齧りながら、昨晩書いた原稿を直す。今もそうやってこれを書いている。朝型人間ではない一方で、残念なことに夜仕事はあまりいい出来にならない。夜書いたものには特有の色気のようなものがあり、翌朝見返して辟易したことが何度あったらう。あの若山牧水も、夜一時半まで歌会をしたとき入睡たさをこらへてよめる歌なればわが歌の松はひよろひよろの松と詠んでいる。ひよろひよろしていたのが「松」の字なのか、もしくは松の立ち姿なのかはわからないけれど、やはり眠いのは駄目である。だが牧水はこもも詠んでいる。△夜為事のことと勞れて飲む酒のつくづくくまし眠りつつ飲む。不出来になると分かっている、だから夜なべはめられない。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭